

## 海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	上田 駿介
所属機関	静岡県立静岡がんセンター
・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名	APDW2024 (アジア太平洋消化器病週間)
渡航期間	自 令和 6年 11月 19日 至 令和 6年 11月 25日
・研究内容 ・国際学会・会議内容	食道胃接合部癌
<p>研究成果 (要約: 800字)</p> <p>この度、私はAPDW2024にて食道胃接合部癌をテーマにした口演を行う機会を得ました。</p> <p>食道胃接合部腺癌(AEGJ)の頻度は欧米と同様に日本でも増加しており、本邦では食道胃接合部(EGJ)の上下2cmに腫瘍中心が存在する腺癌をAEGJと定義しています。しかし、この範囲にはEGJへ進展しない典型的な噴門部胃癌(GCA)も含まれています。本研究では、AEGJをEGJへ進展しないGCA(G群)と、食道に限局もしくはEGJへ進展する腺癌(E群)に分類し、両者の臨床組織学的特徴を比較しました。</p> <p>対象は2010年1月から2023年12月に当院で内視鏡的切除(ER)または外科的切除(SR)を受けたT1-AEGJの271病変です。結果、G群は99病変、E群は172病変でした。患者背景として、G群は高齢(74歳 vs 69歳, <math>P &lt; 0.001</math>)でH. pylori感染率が高く(65.7% vs 30.2%, <math>P &lt; 0.001</math>)、E群では食道裂孔ヘルニア(43.4% vs 66.9%, <math>P &lt; 0.001</math>)および逆流性食道炎(22.2% vs 47.7%, <math>P &lt; 0.001</math>)の頻度が高い傾向が見られました。</p> <p>治療方法では、G群ではERが多く(88.9% vs 76.2%, <math>P = 0.003</math>)、E群ではSRが多い傾向にありました。組織学的には、E群で粘膜下層(SM)浸潤の頻度が高く(27.3% vs 44.8%, <math>P = 0.004</math>)、脈管侵襲の傾向も認められました(13.1% vs 22.1%, <math>P = 0.077</math>)。</p> <p>これらの結果から、EGJへ進展しないGCAはH. pylori感染との関連が強く、SM浸潤が少ない特徴を示し、EGJへ進展するAEGJは食道裂孔ヘルニアや逆流性食道炎との関連が強く、SM浸潤が多い特徴が明らかになりました。本研究は、従来の腫瘍中心に基づくAEGJ分類に対し、EGJへの腫瘍進展を基準とした新たな分類の有用性を示唆する重要な知見を提供しました。</p> <p>また、学会に参加することでアジアを中心として世界における消化器内視鏡に関する最新の知見を学び議論を行った。今回学んだことを今後の日常診療や論文作成に生かす所存です。</p>	